

偉人盛年

春清江上

一唱

寶稿我珍木

寶稿我珍木

明鏡

○江上春興

笑謝鄉

初櫻淺吐二分紅

猶是春寒漠

中吹入桃花吹

可憐身瘦

○又

捲清風節近又多風

餘醉未醒殘夢中

荷花呈艷

曉衫猶漬酒痕紅

秋近風塵以外天明詔優非金馬

入谷仙介著

近代文学としての明治漢詩

近代文学としての
明治漢詩

入谷仙介著

研文出版

入谷 仙介 (いりたに せんすけ)

1933年生。京都大学文学部卒。島根大学教授。

主著 「高啓」(岩波書店), 「古詩選」(朝日新聞社), 「宋詩選」(朝日新聞社), 「王維」(筑摩書房), 「王維研究」(創文社), 「漢詩入門」(日中出版), 「唐詩名作選」(日中出版) など

研文選書 42

近代文学としての明治漢詩

1989年2月1日 初版第1刷発行

定価 1800 円

著 者 入谷 仙介

発行者 山本敬太郎

発行所 研文出版(山本書店出版部)

東京都千代田区神田神保町 2-7

郵便番号 101 振替東京 0-59950

電話 東京 (03) 261-9337

印刷 精興社

製本 大口製本

©S. IRITANI

1989 Printed in Japan

ISBN 4-87636-085-5

近代文学としての明治漢詩／目次

序章 春と憂愁

——森 春濤——

1

第一章 表現者の極北

——森 槐南——

19

第二章 「国民詩人」の栄光と没落

——国分青厓——

53

第三章 漢詩と小説の間

——中野道遙——

91

第四章 異邦人として

——山根立庵——

117

第五章 まぼろしの廬山

——横山耐雪——

143

第六章 近代精神と漢詩

——鷗外・漱石・河上肇——

175

終章 明治の「父と子」

——永井禾原・永井荷風——

217

あとがき

243

序章 春と憂愁

森春濤（一八一九—一八八九）

本名魯直、尾張一宮の人、梁川星巖の門下、明治六（一八七三）年に上京、中央詩壇の指導者となり、多くのすぐれた門人を養成した。春濤詩鈔二〇卷。槐雨の父。

一

江城二月の謡うた

江城の二月 晚梅開き

二月の江城 晚梅落つ

晚梅の花底 美人来たり

花落ちて 美人 いずくに在らんや

美人は見ず 明春の月

明月は人のごとく 春髻はうあつ髻たり

誰たが家の玉笛ぞ 暗やみに声を飛ばすや

一片の春愁 吹きて骨に入る

黯然あんぜんとして別れを経へ 情をなし難く

半夜にまた開く 入破の声

長えに記す 落梅花の一曲

春風の二月 江城に満つるを

旧暦の二月は現行暦の三月に相当する。晩唐の杜牧が「霜葉は二月の花よりも紅なり」(山行)と歌うように、春たけなわの季節とするのが、漢詩の感覚である。実際にも、作者の住む尾張の国、総じて関東以西の太平洋・瀬戸内沿岸の日本では、桜にはまだ早いものの、陽光はすでに明るく、この詩にあるように、梅は盛りをすぎ、桃はほころびそめて、早春ではもはやない。

大川ばたの街の二月、遅咲きの梅は開き、二月の大川ばたの街に、遅咲きの梅は散る。遅咲きの梅の花のもとに美人がやってくる。この花が散ってしまえば、美人はどこへいつてしまふやら。この美人は明春の月を見ることは無いに違いない。おぼろな春の明月は美人にさも似ていることよ。やみの中、どここの家からかの笛の音が浮かんで、しじまの中に広がる春の愁いを骨にまで吹き入れる。あの人との別れのかなしみは心の中に結ばれて耐えがたく、夜半にまたあの人と聞いた笛の結末の調べを聞いた。いつまでも記憶に留まることであろう。「落梅花」の一曲のひびきが、春風の二月の大川ばたの街々に広がっていたのを。

江城二月の句は李白の「江城五月落梅花」(史郎中欽と黃鶴樓上に笛を吹くを聴く)の句にもとづく。「落梅花」は後にも出てくるように、李白の詩の原意は笛の曲名であるが、この詩では、散ってい

く梅の花と、笛の曲とを交錯させることで、春の悩ましいふんい氣をもりあげている。第三句「晚梅の花底美人来たり」は、直接には明の高啓こうけいの「月明の林下に美人来たる」(梅花)から借りてきたものであろうが、このあたりは、初唐の劉廷芝りゅうていしの「洛陽の女兒顔色を惜しみ、行くゆく落花に逢いて長嘆息す。今年花落ちて顔色改まり、明年花開いてまた誰かある」(白頭を悲しむ翁に代る)を下敷にしている。第七句はまた李白の「誰が家の玉笛ぞ暗に声を飛ばす」(春夜洛城に笛を聞く)を丸取りしている。大胆不敵な技巧といわねばならぬが、ここでは前半と後半とを転換する切換えスイッチとして成功している。この句以下の後半は、美人の物思いの内容。春は女性の物思う季節というのは、詩経以来の漢詩の約束ごと。入破は楽曲が終結する直前、急に激しい調子になる部分。

下敷にされている中国の詩は、『唐詩選』に出ているか、さもなくとも極めてポピュラーな、漢詩を読むほどの人ならば、すぐに想起して当然の句ばかりで、一首全体は少しも典故使用による難解感はない。典故を巧みに運用しながら、原典の発想とは離れ、甘くむせっぽく、しかも暗くひめやかな憂愁の世界を紡ぎだしている。森春濤しんしゅんとう二五歳、天保一四(一八四三)年癸卯みずのとうの作である。

春濤の号は、おそらく晩唐の耽美の詩人李商隱りしやういんの「広陵の別後春濤を隔つ」(劉蕡りゅうひんを哭なくす)の句にもとづくものであろう。広陵は今の江蘇省揚州市、杭州・蘇州から北上してきた大運河が、長江を横ぎって唐の都長安に向かう入口にある、中国きっての交通の要衝。古来、商業都市として繁栄、それに伴い、花柳の巷もにぎわって、天下の遊びどころとして聞こえたこと、杜牧が「十年一たび

覺^さむ揚州の夢、嬴^{かち}えたり青樓薄倖^{はくこう}の名」(懷^かいをやる)と歌うがごとくである。「揚州の夢」をかつてともにした友人との間をけだるく幽鬱^{ゆううつ}に隔^へてるのが春濤である。

春の海ひねもすのたりのたりかな(蕪村)

を思^{おも}わせるが、そのように明^あるいのどかな風情ではない。

二

その号のごとく、春濤は春と憂愁とを終生歌い続けた詩人であった。

春 昼

日は桃花^{たんごう}を炙^{あぶ}りて漲江^{ちやうかう}暖^{ぬく}く

鴛鴦^{うんおう}を繡^{しゅう}して了^{おわ}り 睡^{すい}りて双^{さう}を成^{なり}す

嬌愁^{きやうしゅう} 骨^{こつ}に入りて 春^{はる}を那^{いか}んともする無し

残絨^{ざんじゅう}を爛嚼^{らんしゃく}して 午窓^{ごそう}に唾^{つばき}す

うららかな春の日ざしが、くれないの桃の花をあぶるように照らし、雪どけで増水した川面は暖

かけ。おしどりの刺繍は、やっと仕上げてしまったが、その図柄はめおとの番つがいが仲好く睡すてい
るところ。春だというのに、おとめの憂愁は骨にまで食いこんで、どうしようもない。やるせない
ままに、残り糸をくちやくちゃかんで、ま昼の窓につばを吐く。

番いのおしどりは、たがいによりそう男女の表象でもある。全編にみなぎるエロティシズムは、
結句に至って、爆発するような鮮烈さを示す。春濤四七歳、慶応元（一八六五）年乙丑きのとうしの作である。
先の詩との間に時間的な差が感じられるとしたら、中年の肉感性が加わったことぐらいであろう。

ところで、前作との間の二五年間は、どのような時間であつたろうか。いうまでもなく、日本史
上最大といつてよい激動の時期である。天保一四年といえ、大塩平八郎の乱、蛸社の獄はすでに
起っており、異国船の沿海出沒もしだいに度を加え、無気味なうねりはすでに人の目にも著しるく
なっていたが、まだまだ世は「太平」であり、徳川幕府の權威は確固不拔と見えていたのである。そ
れから一〇年、嘉永六（一八五三）年、ペリーの浦賀来航を幕明けとし、安政の大震災、安政日米
条約調印、安政の大獄、桜田門の変、薩英戦争、四国艦隊の下関砲撃、蛤御門の変、幕長戦争と重
大事件があい次ぎ、幕府はその無力さを露呈、幕藩体制の変革が政治的プログラムにようやく上っ
てきた。時代は政治の季節、そうして思想の季節に一気に突入していったのである。

漢詩も、というより漢詩こそは、時代を敏感に反映した文学であった。何となれば、漢詩は当時
の文化を担う武士的知識人の文学であり、そもそも中国で芽生えたその初めから「詩は志なり」

（詩経毛伝序）として、思想の表白であり、政治にコミットする文学たることを期待されていたのである。とりわけ時代を拓く思想に命をかけて、明日を知らぬ政治活動に日夜奔走していた志士たちが、自分の精神のほとぼしりを託したのは漢詩であった。

妻は病床に臥し 児は飢えに泣くも

此の心 誓いて戎夷を攘わんと擬す

今朝 死別と生別とを兼ね

惟だ 皇天后土の知るあり

妻は病床で寝ており、小さいむす子はひもじがって泣きさけんでいるが、私の心は醜の荒えびすを断じて打ちはらおうと固く誓っている。今朝、出発すれば、ふたたび生きて帰ってくることはあるまいから、今日の別れは生き別れではあるけれども、実は死に別れを兼ねているのだ。そのことをご存じなのは、ただ天津神、国津神ばかり。

梅田雲浜が攘夷活動を決意して、家を出る時の、あまりにも有名な詩。維新の志士たちの漢詩の多くは、このような思想的ヴォルテージのきわめて高い、政治的決意表明であり、実践活動、雲浜がそうであったように、文字通り生命をかけたそれ、と分ちがたく結びついていた。むしろ彼らの

活動そのものがこうした詩を要求したのである。「幕末の志士たちの多くは、詩人^{（1）}だった。かれらはそのいのちがけの政治的行動をとおして、感激のわくがまま、悲憤の情のほとばしるがままに、詩歌を作り吟誦した」と嶋岡晨がいう通りである。

春濤の詩集『春濤詩鈔^{（2）}』二十巻をひもどく時、私たちが一驚するのは、そうした時代的情況がいったい反映していないことである。もちろん、若い時と晩年の詩とがまったく同じというのではない。老いが深まるにつれて、春と女性の憂愁は姿を消して、秋と老年の憂愁があらわになる。

秋雨嘆

淋淋^{りんりん} 滴滴^{しゅうしゅう} さらに蕭蕭^{しょうしょう}

老枕^{らうしん} 眠らず 魂^{たま} 銷^きえ易^{やす}し

軒前^{けんぜん}に向かいて句を題せんと欲すれば

端^は無くも敗^は尽^すす 緑芭蕉

しとしとと、はらはらと、さらにざわざわと、秋雨の音を聞きつつ臥床していると、老いの枕に眠られず、魂はややもすれば消え行かんとする。軒先に出て詩を書きつけようとすれば、思いもよ

らず緑だった芭蕉が枯れ尽している。

明治二二（一八八九）年己丑^{つものうし}、七一歳、すなわち没する直前の作である。起句、擬声語の連なりの中に、秋雨のしだいに降りしきってくるのを表現する。それはしだいに深まる老病の象徴でもあろう。枯れ尽した緑芭蕉はみずからの姿。鮮烈な緑は、はなやかなりし過去であらう。

しかし、そうしたことを別として、内容的には時代的な変化はほとんど無い。詩鈔は、漢詩人の習慣に従って、年を記すのに年号を用いず、干支で一貫しているために、一そうその印象を強める。気をつけていれば、新暦改暦とか紀元節といった、明治の新事物の詩もあるのだが、卒然として読めば、その間に一大変革が介在しているということに気がつかずに終るかもしれない。

春濤がそれで済んだはずは無いのである。第一に、彼はいやしくも漢詩人である。俳諧師や戯作者ではない。漢詩は先にも述べたように、理念的に時代にコミットすることを要請される文学なのである。それはまあ建前論にすぎないと、言えば言えよう。彼はそれを要請する濃密な雰囲気に取り巻かれていたはずなのである。彼の師、梁川星巖は、晩年、急速に政治に傾斜して、あわや安政の大獄に連座する直前、コレラによる急死で救われ、妻紅蘭が身代りに入獄した事は著名である。同じく大獄に連座して殺された頼三樹三郎、天誅組の挙兵に敗れて死んだ藤本鉄石は、交友の内にあった。才女で和歌をよくした三度めの妻の清^{きよ}は、熱烈な勤皇派の支持者であったといわれる。彼の身辺には上洛して政治にアンガジュマンせよとの圧力が常にかかっていた。当時、春濤自身が所屬

していた町人、また農民の中上層部、いわゆる草莽そうもうの間に、上洛して政治活動に身を投じようという衝動がいかに強烈であったか、島崎藤村『夜明け前』において、家を守る義務との板挟みになった、青山半蔵の苦悩として活写されている通りである。しかし春濤はついに動かなかった。

文政二（一八一九）年己卯つちのとうに尾張の商業都市一宮に医師の子として生まれた春濤は、ペリー来航の嘉永六年にはすでに三五歳であるから、維新の志士の多くよりも年長である。明治六年六〇歳で上京、下谷の摩利支天横丁（茉莉凹巷）に居を構えるまで、はじめは一宮、のちに名古屋に住み、時に岐阜に寓居した。嘉永安政の間に何度か京坂に遊んでおり、嘉永四年には江戸に下っているが、大獄から維新に至る激動の時期、飛騨高山、越前に遊んだほか、ほとんど名古屋を動かなかった。激動をやりすごしたと言わねばならぬ。春濤のような人物が、時局に対してこのような態度を取る時、単なる無関心でなく、それ自体に意義があると考えるべきであろう。

三

春濤は自己の感性に固執しつづけ、憂愁に固執しつづけた詩人であった。では、その感性の質、憂愁の質はどのようなものであったであろうか。